

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業  
分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 氏名 今城靖明 所属機関 山口大学整形外科 役職 准教授

研究要旨

OPLL を含む変性頸髄症において、が画像所見と神経学的所見との関係を明らかにする。Hoffmann 反射は、慢性の脊髄圧迫、重度の脊髄圧迫に関係していたが、動的因子には関係なかった。Babinski 徴候は頸椎前屈時の重度脊髄圧迫に関係していた。

A. 研究目的

OPLL を含む変性頸髄症における画像所見と神経学的所見との関係を明らかにする。また、変性頸髄症の診断に画像と神経所見との一致の有用性を評価する。

B. 研究方法

OPLL 50 例を含む変性頸髄症 226 例から患者背景、Kinematic CT ミエログラフィー、MRI, X 線による画像所見、神経所見、治療成績を後ろ向きに収集して解析を行った。

(倫理面への配慮も記入)

当院 IRB 承認あり (H2019-058-2)

C. 研究結果

Hoffmann 反射は、MRI の髄内高輝度変化と C6/7 以外の障害責任高位と明らかに関係していた。Babinski 徴候は前屈時の脊髄圧迫面積が狭いことに明らかに関係していた。

D. 考察、

Hoffmann 反射は反射中枢が C8 髄節であるため、C6/7 が障害責任高位であれば現れにくいと考えられる。Babinski 徴候は頸椎後弯や OPLL では、前屈時に脊髄が前方から圧迫されることに関係していた。この状態で

は脊髄前索、側索、後索の順に障害される。

Babinski 徴候は前索への障害が関係している。

E. 結論

Hoffmann 反射は、慢性の脊髄圧迫、重度の脊髄圧迫に関係していたが、動的因子には関係なかった。Babinski 徴候は頸椎前屈時の重度脊髄圧迫に関係していた。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G. 研究発表

1. 論文発表

Journal of Neurosurgery; Spine 2021.35(3);308-19. The associations between radiological and neurological findings of degenerative cervical myelopathy: radiological analysis based on kinematic CT myelography and evoked potentials of the spinal cord. Masahiro Funaba, Yasuaki Imajo, Hidenori Suzuki, Norihiro Nishida, Yuji Nagao, Takuya Sakamoto, Kazuhiro Fujimoto, Takashi Sakai.

2. 学会発表

Degenerative cervical myelopathy における神経学的所見と Kinematic CT ミエログラフィーを用いた画像所見の関連  
船場 真裕, 今城 靖明, 鈴木 秀典, 永尾

祐治, 坂本 拓哉, 藤本 和弘, 坂井 孝司

日本脊椎脊髄病学会 2021

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他